

今日世眼導師の行に住す

此段は仏陀は世界人類の眼目にて弥陀は靈界の日光であることを明し玉う。仏陀は明かに人生を自覚し如実に人生の帰趣の真理を悟り玉えり。即ち自ら無明の眠に生死の夢醒て正覚を得、弥陀無量光明の中にありて一切衆生の知見の眼を明け自ら知見し玉える弥陀光明の中に誘引れて永恒の生命と常住の平和の裡に帰すべきよう指導し玉えり。若し世の眠たる仏陀世に出玉わずば世は闇黒にして一切の衆生人生をして空しく冥々に葬り生死に流転して出期あることなかるべし。されば世の人々よ世の眠たる釈尊の指導の下に弥陀光明の裡に永恒の平和に入るべき道を求め玉え。

知力の信仰

知力ちりきの信仰しんこうとは仏陀出世ぶつだいしゅっせの一大事いちだいじなる衆生しゆじやうの仏知見ぶつちけんを開ひらきて如来にょらいの正道しやうどうを悟さとらしむるにありとは、法華經ほけきやうに示しめさるる處ところ、仏知見ぶつちけん開ひらげざれば、如来にょらいの实在じつざいにまた如来にょらいの真理しんりを知ることできぬ。全く如来にょらいの实在じつざいを信知しんちして自己じこと如来にょらいとは実に父子ふしである。父子ふしの性天然しやうてんねんに契合けいごうして我われは全く如来にょらいの子こにして如来にょらいは全く我父わがちちなり。然されば即ち父ちちの所有ゆうは子この有ゆうなれば宇宙うちゆうの秘密藏ひみつぞう無尽むじんの宝たからは即ち父ちちより譲与じやうよせらるるものである。知力ちりきの信仰しんこうを通仏教つうぶつぎやうにて転迷開悟てんめいかいごとす。之これを宗教的しゆうきやうてきに云いわば自己じこ全く如来にょらいの子こたる仏性ぶつしやうあるを知らず。また如来にょらいの光明こうみやうによりて永恒えいごうの生命せいめいを得うべきを信知しんちせず。自ら人生みづかじんせいを闇黒あんこくに葬ほうむるを迷まよとす。我われら無明むみやうの凡夫ぼんぶが如来にょらいの光明こうみやうに摂化せつけせられて此このまま如来にょらいの光明こうみやう生活みやうせいに入いることを、了々りやうりやうと信知しんちするは即ち一分いちぶんの悟さとりなり。

世眼の意義

仏陀を世眼と称する所以は若し人の身体に眼目なくば全身闇黒なり。自己闇黒なれば一切万物を見ることはできぬ。人にも眼ありて世界の総てを視、また目的の地に達することを得る如く現世界はいかに広大に衆生は無数なるも、若し仏陀なる世眼出世し玉わずば一切の衆生界は闇黒なり。また天体に太陽無りせば此地上は闇黒なり。若し弥陀の靈日なからんか、宇宙法界は真理の光明あることなし。若し仏陀世に出で玉わずば、一切衆生には知見の眼なく世間門に、善惡の因に、苦樂の果ある理を知るなく況や無上正覺の道を照す弥陀の光明の存することに於てをや。然るに仏陀は自ら仏知見を開きて、一方の世間には因果の理法あることを教え、また弥陀の光明に依て、無上正覺に入り永恒常樂に還るの真理を覺り玉えり。而して一切衆生を導くに

自ら覺り玉ふ如くに示し玉う。故に眼開きて一切を覺らしめ畜に覺るのみにあらず、
 覺る如くに実践躬行し智徳円満して仏と爲り、而して一切を導くに如来無量光に依て
 靈に復活し自ら己の完全なりし如くに何人も完全に靈化すべく指導し玉う。故に世の
 眼としまた眞の導師に在ませり。

仏陀は自覺の道を求め玉いき

仏陀は本弥陀本覺の都より此世に出玉えり。故に自身は本より知見の眼は有ておれ
 ど、我等如き衆生の無明を憐み知眼を開きて真理の光明に導かん爲に此世に出給えり。
 人類を教化せんが爲には斯土の衆生に随類応同して凡夫の如くに無明の殻を覆うて人
 の子と生れ給えり。されば凡位太子の当時に於て人生自覺の光明を発見せんが爲には
 非常に煩悶なされた。其は嚮に已に述し如し。但し先には感情の方より人生苦悶解脱

を仏陀が如何にして生死の苦を脱すべきかの求道者として説たりき。今は転じて知力的に更に仏陀が人生自覺の道を求め、竟に理想は實現して、仏知見を開きて一切種智を得て了々として人生の秘奥を悟り、宇宙秘密藏を開き玉い而して一切衆生をして、仏知見を開かしむるの道を開き給うに到るまでの順序を述べんとす。されば太子宮中に在せし時如何にせば自己本覺の光明を発見し何等か人生の歸趣すべき処ぞ。実に生死の道は闇澹として闇く、曉は何れの時ぞ十方何れに向つてか心靈日の光輝を見ん。竊々冥々として生死解脱の道那邊に存するを知らず。生を明らめ死を明むる処に、永遠の光明は発見するならん。いかがせん、正覺無量光の日は昇るにあらざれば、心神は永夜に彷徨せざるを得ぬ。人生自覺の光を得ざれば、王位夫れ何かせん。栄花の夢を貪りて生靈を闇黒裡に葬り去ることは、聖たる太子の実に忍びざる処、金剛の一心は、竟に王宮を忍び出ざるをえぬ。されば太子が曾て、跋伽仙の苦行林に在す時に二人の王使は太子に對して父王の命を奏白せしに、太子曰く父王の恩愛我顧みざるにあらず、只生死の苦

を恐れて出離の道を求む。若し生死の本源を自覺するに至らば何ぞ夫れ父王に背きて家を出べき。一旦父王の意に背くは当来永く父王と共に永遠の生命に入る道を發見せんが為なり。若し我れ宮に還らば衆生の為に孰れか生死決定の光を見出すべきものぞ曾て聞く昔の諸王入山学道せしも皆中途にして廢し還て宮中に在て欲樂を受くと。今其諸王の神識何の処に在る、悉く皆闇澹たる冥裡に没して寸光の遺るなし。我若し宮に還らば永く無明の長夜を開くに由なし。と告玉えば、王使改めて白さく、太子の御志甚だ潔よし。然れども先哲の説を聞くに未来は定めて果報ありとの説あり。或はまた未来の果報は無しと説くあり。先哲尚未だ決定して有無を知らず。太子何ぞ現在の樂を捨て未来不定の果報を求玉うや。生死の果報未だ決定せず争か解脱の果を求め玉う。願くは疾く宮に還らせ玉えと奏じ上れば、太子の曰く、実に然り、我訪いし処の二仙も未来の果報を説くこと一は有と曰い他は無と説く。皆疑惑の説にして決定の説にあらず故に我は彼等が教に随わざるなり。され共未来有無の不了を以て我を

詰るべからず。我は当來の樂果を覺めんが爲に此に來るにあらず。今現前に生老病死の苦を脱することを得ず。我は之解脱の知見を求むるなり。必ず當に道成就の曉には父王及び一切を度すべし、と曰えり。是正しく太子が生死自覺の要求の切なることを知るべし。

太子阿羅々仙に就て生死を脱すべき法要を問玉うに、仙云く、衆生の初めは冥所より我慢起れり。慢より痴心を生じ痴より染愛を生じ愛より五欲塵氣を生じ塵氣より五大を生じ五大より貪瞋煩惱を生じ此煩惱が生死に流轉せしむ。故に人生死を脱離せんと欲せば家を捨て欲を棄て、戒を持ち禪定を修すべし。禪定に次第あり、初禪定に入て喜心を得、第二禪定に入て樂根を得、第三禪定に入て捨根を得、第四禪定に入て無想処に達す。世の梵士は之を以て涅槃とす。実は是未だ眞の解脱にあらず。我が謂ゆる解脱は是より色想を離れて空処に入り有想を離れて識処に入り一識を觀じて無所有処に入り一切の相を解脱して非想非々想処に入る之を究めて解脱と名づく、是眞の彼岸

なり。太子たいし若もし四し苦くを脱だつせんと欲ほつせば、当まさに斯かくの如ごとく行ぎやうずべしと、仙せんの説せつを聞き玉たまいて太子たいし問と玉たまわく謂いわゆる非ひ想そう非ひ々ひ想そう処しよには我があり哉や、我がなし哉や、若もし我がなしとせば非ひ想そう非ひ々ひ想そうと云いうべからず。若もし我が有ありとせば我がは知ちありとせんか、知ちなしとせんか、若もし知ちなくば木ぼく石せきに同おなじ若もし知ちあらば攀はん縁えんあり。然しからば染ぜん著じやく亦また生しやうずべし。是これ究く竟きやう解げ脱だつと云いうべけんやと。仙せん遂ついに答こたうるこ能あたわず。太たい子し即すなち阿あ羅ら々せん仙せんの許もとを辞じしてウウトトラ仙せん処しよに訪おとづれて道みちを問と玉たまうに、彼かれは稍や微び細さいの境きやうを觀かんずる如ごときも彼かれも亦また我がありて計けし想そうと非ひ想そうとを離はなると説とくとどに止とどまり、アアラ、仙せんと大たい差さなし。是こに於おいて太たい子しは自みづかし思しゆい惟むじし無むじ上しやう菩ぼ提だいを証しやうし一切さいしゆ種ちゆ智ちを得えんことは、他たに依よつて求もとめ得うべきに非あらず。唯ただ自みづかし修しゆして自みづかし証しやう得とくするに如しかじと去さり玉たまう。

仏陀の自覚

仏陀が当に正覺を成ぜんとするに先だち、群魔軍來りて菩薩を撓亂す。時に空中に多眉神あり、讚じて曰く、世間衆生愚痴に惑えり。智慧無くして邪見に著す。菩薩今法眼を開き正道を得て衆生を永遠の光明に導んとす。亦衆生智慧光なく大闇黒の中に居て茫然として何に帰趣すべきを知らず。菩薩は智慧の燈を照して其をして正道を明し玉う。一切衆生の眞導師なり。魔衆等妨害爲すこと勿れと。

菩薩は摩訶陀国菩提道場に請て、畢波羅樹の下なる金剛座上に柔軟草を敷きて結跏趺座し玉い「我一切種智を得ずんば此座を起じ」と誓い給えり。時に心意清淨にして湛然不動なり。天に雲霧なく風靜かに空清く星月皎潔たる夜に於て菩薩妙覺分法の中、絶えず加行を修し玉い、初夜分に神境智を得て三界十方無量の世界を照し第二更に神通眼を開き、三世の真相を觀すること掌中を見るが如し。第三更に三界の因果を洞觀し玉い第四更に明星出る時に正しく朗然として無明を除き無上正眞の道を得、即ち一切種智を得玉えり。十力四無畏十八不共法悉く証し玉えば、三界は是我有なり、

そのなか しゆじよう 其中の衆生は皆吾子なりと覺り此に於て大智慧の眼を開き三界の導師と成り玉えり。

正覚と涅槃

大乘仏教には菩薩が無上道心を起して飽迄も向上すべき、諸の波羅蜜を修して究竟して得る処を無上正覚とす。即ち衆生の無明及び諸の煩惱を転じて無上の正覚を成ずる処、一切種智を以て有ゆる真理を証りて遺すこと無く然して覺るのみならず、即ち道德的に円満に完成して靈的人格の極致に到達し最高徳最善の究極する処、是因円果満の正報である。之を無上正覚とす。

大涅槃とは菩薩が無量生死の苦を解脱して永恒の生命常住の平和一切と共に究竟安寧を得たる処、仏陀の得玉う仏果である正覚とは横に徧一切の無尽の理を証見し玉う一切種智なり。喩えば日光昇る時は地上の万物悉く炳然たる如く大智慧の日光徧

ねく一切の事理を照して遺すことなきを正覚と云う。涅槃とは時間的に三世際を尽して永恒に變ずることなき常住の生命である。此正覚と涅槃とは仏果の依正にて、時間空間を超越して而も一切の時間と空間とに徧在徧照する靈徳である。

正覚と無量光

仏陀は大哲人にして大宗教家なり。大哲人（聖道家）としての究極する処は即ち無上正覚を得て一切種智を以て一切の真理を照して智徳円満なる靈格の完成したる無上の覚位なり。大宗教家としての仏陀は金剛信心の開発したる処、無量光の大日輪が円かに心靈界を照して蓮花藏世界所有の一切悉く炳然として顕現す。無量光に全人格顕現と云うと、無上正覚を得て一切の真理を知見すと云とは実に同一なれども、哲人としては自ら正覚を得と云。主体を本位として証得の功を自己に在りとし正覚を成ずと。

宗教家しゅうきやうかとしては無量光むりやうこう如来にょらいの光明こうみょうに依て覚醒かくせいしたる仏陀ぶつだなれば、功こうを客体きやくたいなる弥陀みだに在るものとするにあり。聖道しやうどうは自己じこを本位ほんいとして宗教しゅうきやうは客体きやくたいなる如来にょらいの増上縁ぞうじょうえんの力ちからを本もととす。今教こんきやうの宗教家しゅうきやうかとして仏陀ぶつだは無量光むりやうこうの日光にっこうに自己じこの眼醒めざめたる処ところの世眼せげんは、弥陀みだ無量光むりやうこうの心靈界しんれいかいを照てらし玉たまうち中に宗教しゅうきやう的てきの仏眼ぶつげんの開ひらきたる仏陀ぶつだは一切衆生いっさいしゆじやうの信心しんじんを開発かいはつして斯光このこう明みやう中に靈的人格れいてきじんかくとして、如実にょじつに行爲こういすべきように指導しどうし玉たまえり。仏陀ぶつだは一切いっさいの人ひとに靈れいに眼醒めざめて価値かちある、意味いみある、生活せいかつとなり、ますます向上こうじやうして無上覺むじやうかくに到いたるべきように指導しどうし玉たまえり。

聖道的しやうどうてきに正覺しやうがくを得うると云いい、宗教しゅうきやう的てきに無量光明むりやうこうみやうちゆう中に復活ふっかつしたと云いうとは実じつは同一義どういつぎに帰きするのである。

涅槃と無量寿

仏陀ぶつだの指導しどうの目的もくてきは人生じんせい々死しの苦くを脱だつして、永生えいせい涅槃ねはんなる常樂じょうらくの都みやこに到達とうたつするにあり。人は生ひとれつきの心こころは顛倒てんどうして自おのから苦惱くのおう煩悶はんもんすること免まぬれず。現在げんざい生死しじの我がを真しん我がと執しゅうし無常むじょうの自然しぜんを常つねと思おもいて自みづから顛倒てんどう夢想むそうの爲ために自みづから苦悶くもんす。仏陀ぶつだは生死しじの眞源しんげんを明あきらかに証さりて涅槃ねはん常樂じょうらくを得え玉たまえり。若もし仏陀ぶつだの証しょう得とくし玉たまえる如ごとく精神せいしんの世界せかいに導みちびかれて其それに証入しょうにゅうする時ときは、初はじめて常住じょうじゅうの平和へいわと永生えいせいの樂果らくくとが得えらるる。仏陀ぶつだが精神せいしん的に安住あんじゅうし玉たまふ処ところを大涅槃だいねはんと爲なす。涅槃ねはんに四しあり。一、自性じしやう清淨じやうじやう涅槃ねはん。元來がんらい自性じしやうの本源ほんげんは一個いつこの肉體にくたいを以もつて依所えしよとするものにあらず。絶對ぜつたいなる宇宙うちゅうの根底こんていとどういつたいどういつたいにして本然ほんねん清淨じやうじやうにして不生ふしょう不滅ふめつ永恒えいごう常爾じやうじやうの本体ほんたいである。之これを自性じしやう涅槃ねはんと云いう。然しかるに衆生しゆじやうが自己じこの本源ほんげんを覺さとらずして今此いまこの仮かりの體たいを以もつて自己じこと謂おもうておる爲ために生死しじの中うちに迷没めいもつしておる。二、有余うよ涅槃ねはん。有余うよとは此有このうよ余依えの肉體にくたいを云いう。此肉體このにくたいを有もち乍ながらも無漏むろ聖道じやうどうを修行しゆぎやうして自性じしやうの本源ほんげんを証得しょうとくすれば、神こころは本来ほんらいの清淨じやうじやう涅槃ねはんが顯あらわれて、精神せいしん的に永恒えいごう常然じやうじやうの涅槃界ねはんかいに安住あんじゅうすることを得えらる。然しかれども肉

体は因果に約束せられて、飢を感じ衣食も要あり。三、無余涅槃。先に涅槃を証得すれば肉体を有ち乍ら精神的に永恒常住の靈界に安住したり。今は肉の命が尽てよりは正しく理想が現実と成り来りしを眞実無余涅槃に入る。

四、無住处涅槃。諸仏は生死に住せず、涅槃に住せず。常に神は常楽我淨の靈界に安住し乍ら一方には衆生済度の為に生死界に現じて常恒に度生の功用を施し玉う。故に無住处涅槃とす。

仏教の終局の帰着する涅槃は基督の天国また仏教にて蓮華藏世界常寂光土自性清淨土極樂淨土等の種々の麗わしき名を以て表明せられておる。

今無量寿国また極樂土是涅槃界の異名にして極樂は常住安樂自在清淨の四徳を以て莊嚴す。涅槃と無量寿とは同体の異名にて仏陀が衆生を導き玉う処は、此永生常樂の処に安住せしむるにあり。

仏陀は自から正覺を成じて無量光を覺り涅槃の無量寿国に安住して一切衆生を自己

の証得し玉う処に導き玉う。
しょうとく たま ところ みちび たま

弥陀の智慧光と仏陀の世眼

弥陀は靈界の日光にして仏陀は靈の眼である。弥陀の靈日は永しえに照せども、若し仏眼ある仏陀出世し玉わずば衆生は無明永夜の中に彷徨して竟に永遠の光を覺るに由なし。

弥陀は無限の光明なれども、若し人の心理を分類して此に對する如來の光明は即ち知力に對する智慧光である。故に仏陀世眼が世の導師と為りて衆生の智眼を開かしむるは、即ち弥陀の智慧光である。弥陀の智慧光は仏陀の世眼を通じて衆生に導くに仏の知見を開示し仏の正道に悟入せしむるにあり。

此を宗教的に云わば一心に念仏して弥陀の光明に摂化せられてよりは、喩えば、

卵たまごは母おやどり鶏しを知しること能あたわざれども、既すでに卵たまごが孵ふ化かして雛ひなと為なる時ときは、母おやどり鶏しも、吾わがこ子こた
るを識しり雛ひなも其その母ははを識しるが如ごとし。我われら等らが信しん心じん開かい発はつする時ときは如に来らいは我わが親おやにて、我われは如に来らい
のこ子こなるを知しる。父ちちの所しよ有ゆうは悉ことごとく子この有ゆうなり。宇うち宙ゆう一いつ切さいの万ばん有ゆうは悉ことごとく自じ己しん心ちゆう中ちゆうの
所しよ有ゆうなるを識しる。

智ち慧え光こうは我われらが知ち見けんを明あかし我われらに如に来らいの真しん理りを悟さとらしむ。

自覚の要ある我等

智ち慧え光こうの眼まなこたる仏ぶつ陀だが世よの一切いっさいの眼まなことなりて衆しゆ生じやうを永えい遠えんの光ひかりに引いん導どうし玉たまう所以ゆえんは、
先さきに述のべように、喻たとえば、人ひとの身しん体たいに眼がん目もくなき時ときは全ぜん体たい闇あん黒こくなる如ごとく、現げん世せ界かいは広こう大だい
に人じん類るいは無む数すうである。然しかるに若もし夫それ仏ぶつ陀だの智ち慧え眼げん出しゅ世せし玉たまわらずば世よは闇あん黒こくなり、人じん
類るいは闇やみに生うまゝやみに死しし人じん生せいの帰き趣しゆする処ところ、宇うち宙ゆう万ばん有ゆうの理りに於おいても、知しるに縁えんなく、

人に眼目なく天に日光無き如し。仏陀が世に出でまさずば、世間善惡の因果其業に因て六道苦樂の果報あることを知らず。進んで出世間の因果として無漏聖道の因に依て無為涅槃の果あるを明めず、茫々冥々として闇きより闇に入るのみ。經に世の人善を作して善を得道を為して道を得ることを信ぜず。人死して更に生じ惠施して福を得ることを信ぜず。善惡の事都て之を信ぜず。之を然らずと謂いて終に是とすること無し。又經に道を行じて度世を得べきことを信ぜず。死後に神識更に生ずることを信ぜず。乃至生死善惡の趣自然に是あることを開示すれども、敢て之を信ぜず。苦心に与に語れども其人に益なし。心中閉塞して意開解せず。大命終らんとするに曼んで悔懼交至る、予め善を修めず。窮に臨んで悔とも及ぶべけんや。

經に示し玉える如く人類は生死の本源と解脱の真理は自ら覺ること能わず。故に仏陀世に出玉う。喻ば健全なる頭腦を有ておる人にてても教育等の知能啓発すべき機会を得ざれば知識を開発し能わざる如く、人は本能的に宗教精神の機関たる靈性は具

有^{ゆう}す、然^{しか}れども之^{これ}を開^{かい}発^{はつ}すべ^き機^{かい}會^{かい}を与^{あた}えるにあらざれば、靈^{れい}的^{てき}自^じ覺^{かく}し能^{あた}わじ。

見惑の先天的と後天的

人^{ひと}は真^{しん}の自^じ覺^{かく}せず、又終局^{またしゆうきよく}の帰趣^{きしゆ}する処^{ところ}を自^じ覺^{かく}せずして、人生^{じんせい}の行路^{こうろ}を辿^{たど}るものは盲^{もう}目的^{もくてき}生活^{せいかう}である。若^も唯^{ただ}人生^{じんせい}を営^いみ以^{もつ}て自家^{じか}を保存^{ぼぜん}し生殖^{せいしよく}以^{もつ}て種族^{しゆぞく}保存^{ぼぜん}のみを以^{もつ}て足^たれりと為^する如^{ごと}く、動植物^{どうしよく}生活^{せいかう}ならば、万^{ばん}物^{ぶつ}靈^{れい}長^{ちやう}の価^か値^ち那^な辺^{へん}にか存^{そん}す。

人^{ひと}が永^{えい}遠^{えん}の光^{こう}明^{めい}に向^{むか}つて価^か値^ちある人生^{じんせい}、真^{しん}意^いある生活^{せいかう}に入^いること能^{あた}わざる所以^{ゆえん}は、何^{なん}ぞや。有^{ゆう}為^ゐなる人^{じん}士^しをして、肉^{にく}の奴^ど隸^{れい}として冥^{めい}々^{めい}たる塵^{じん}路^ろに生^{せい}を葬^{ほう}り去^さるものは何^{なん}故^こぞ。其^{それ}は未^{いま}だ正^{しやう}智^ち見^{けん}なる自^じ覺^{かく}の光^{こう}明^{めい}を得^えざる為^{ため}なり。人^{ひと}が靈^{れい}的^{てき}自^じ覺^{かく}の光^{ひかり}を得^うるに大^{おほい}に障^{しょう}礙^{がい}をなすものあり。此^{これ}を見^{けん}惑^{わく}と云^{いう}。此^{これ}に先^{せん}天^{てん}的^{てき}と、後^{こう}天^{てん}的^{てき}とあり。

一、根本^{こんぽん}的^{てき}無^む明^{めい}。二、後^{こう}天^{てん}的^{てき}の見^{けん}惑^{わく}。根本^{こんぽん}的^{てき}無^む明^{めい}は人^{じん}類^{るい}も他^たの生^{せい}物^{ぶつ}と同^{おな}じく生^{せい}理^り的^{てき}

衝動たる、只活んと欲する性のみが働きて盲動的なる、本能的に衝動的に生きておるに過ぎぬ。また意識的に知識は働きても、また靈性を具有するも之を開発するに非ざれば、自覺の光明は発しえぬ。是れ根本的の無明である。

二、後天的の見惑とは、此の惑は不正なる見識が還て正知を妨たげる。即ち種々の學說憶測の説に惑うて、正知見を開くに障害を為すものである。此に十見あり。五利使と、五鈍使とす。中に就て初の五利使なるものが世の有識の見解を惑わしめ、不正見に陥入らしむ、障害物である。

五利使とは、一身見、二辺見、三邪見、四取見、五戒禁取見

一、身見とは天台四教義に諸衆生が身と心との、すべての仮和合物を妄に計りて身と為。即ち我と謂うて此身見に由て心神を驅役して業を造り流転を為す。二、辺見とは断常の二見に辺する。断見とは、此自我は全く生れたので死すれば、断滅に歸してしまふものと計する。常見とは人間に定まって人間にて常でおると云。此れ有とか無

とかの一辺に偏す見解を執する者を云。三、邪見とは邪心に理を取りて善に楽果なく、悪にも苦果なしと、因果を撓無し聖道を亡する見である。四、取見とは謂ゆる先入主の見、人はたとい真理に非ざるも、先に受得したる理は本能の胸が占領せられて先入主と為りて後に真理を聞ても還て疑うものなり。之等を取見と為す。五に戒禁取見、例せば基督の血と肉とを表するパンと葡萄酒漿とは、此は基督の贖罪を追懐し自己の信心を深刻にせんが為の方便なるを覺らず。全く基督の血と肉とが自己の贖罪と自己の真因なりと、固取る如きの類。諸の外道非戒を謬て戒と謂うて執するものを戒取見と名づく。此外に五鈍使等の我慾より出で宗教心又道德心を惑わす見解あれども之を略す。

又現今世間に科学万能を以て宗教また哲学をも悉く科学の範囲に取込て仕舞う、自然科学の実証にあらざれば、真理でないと言ふ偏見なる学者あり。世に深く靈性的方面に素養なきもの、為めに往々に惑わさるるあり。彼らは宗教的哲學的の範囲を侵

して唯物主義を以て人生及び靈魂等を説明す。其代表たるヘツケルの如きは謂く、人の精神また意識と云も所詮は人の腦髓神經等を組織する細胞に過ぎぬ。其細胞は物質原子の聚合物であり、其原子に不滅と勢力保存の性ありと。夫が自然の法則に依て聚合して、父の身体をも組織し、またすべての動植物をも組織す。人の精神たる腦髓の細胞も只代々に、進化したる遺伝物質に人的勢力を有するのみにて細胞以外に靈的存在することを認めず。人の身体は、凡そ四百兆の細胞を以て聚合せる団体であるが、此四百兆の細胞は、一々皆生命なので心臓の細胞の如きは人の身体より切離ちても、数時間生活力を用ておるのである。人体は無数の生命の団体なので夫らを離れて別に生命とか又靈魂と云物は、認められぬ。また人の靈魂と云うも生殖細胞の精子卵子の細胞なる物質の勢力に外ならぬ。父母の生殖細胞、即ち父の方の精子と母の卵子との両方から合した処に人の靈魂も産づけられたものに過ぎぬと。

メチニコフ(細菌学者)は、宗教の靈魂不滅は今日の科学を以て証明ができぬ。科

学的知識と矛盾するが故に、宗教や哲学では逆も死の怖畏を慰藉することはできぬ、
 科学の進歩は少くも現代よりも老衰を遅うし長命を保ち得べし。人間は或限度に長寿
 を保てば自然に死する。彼の蛾の一種が暫らく食いて竟には食欲も失ない数時間にて
 生殖を行ない直に死滅す。人類も極度に其生命を保つ時は自然に死に至る。生活の慾
 を去らば喜んで死ぬを得べし。人類進歩の目的は一切の疾病と矛盾とを除きて、自然
 的死に至るまで長寿せしむるにあり。此に至るの唯一の道は科学あるのみと。
 是等は人間の全体を唯物質の方面より観て全と謂える、動もすれば、世の青年等
 をして無神無霊等の邪見に陥らしむるの恐なきにあらず。

靈魂有無説の概略

個性の霊と云うものの断滅であると、また未来に存続するとの二説あり。中に断滅

説は此身の死を以て全く靈の終局とす。斷滅の中に一切皆空と雖も形体の死と共に滅するにあらず空なる精神的の物死後に存続を許すの説あり。只個性の未來存続をば否定するのと個性存続中に死後靈魂形質に有無の二説あり。

靈魂有無の中、有の中に形質ありと、形質なきとの二説あり。形質あると云中に二あり。一、現世に等しきものと、また細微身（エーテル的）と、形質なきも只知覚在りと云説あり。無の方に一切皆空と、また個性的靈魂なしとの説もある。

靈魂の帰趣につきての諸説の概略。人死すれば魂魄離散は儒教にて、羽化登仙の説は道家なり、迷時は転生輪廻し悟時は成仏涅槃をうとは仏教にて、天国と地獄とに昇降するは基督教なり。

靈魂種々の説

ローマてんしゆきよう
羅馬天主教によれば父なる神と子なる神とは、其性同一ならざれども、相等し、且つ聖靈なるものも、又此と等しと云える三位一体説、基督は純なる神たると共に全き人と云う基督神人説、また人間は生来罪に汚たる者にて自ら救うこと能わざれ共、唯神の愛を以て救わるといふ人間論あり。聖アウガスチン云く、彼は思えらく人類の祖アダムが自由意志を以て罪惡を犯せるに由り其子孫たる吾人は其原罪の爲に皆罪を犯すべき性を享て之に汚れて、終に意志の自由を失ない罪を犯さざるを得ざるの狀態に陥れり。然れども神の慈愛を以て人間を救わんと欲し神は基督を以て人類の罪を神に贖わんが爲に世に出で死して之を代う。若し神の子出世ならんか、何人と雖も神に救済せらるることを得ず。また地上に於て基督の救済事業を継続するものは、教会である故に教会はキリストの代表者である故に教会以外に救済の道を求むべき處あらず。彼は救済の中心を教会に置き。又彼は一面には吾人が意識中にある我的存在の確實なるを認め一切經驗の究竟は吾人の意識に求めざるべからずと。彼は一面には吾人以

外の教会を救済所と爲し一方には各自の実証する處の基本として神を信ぜよと云えり。
ルーテルは、病革まるに及んで我心靈をば汝の手に納め玉え、此肉体を離るとも我
永久に神と偕に在らんと祈れり。

人生觀若しくは未來觀等に於て科学の知識のみに意を用うる人の不正見に惑い易き
は唯物主義である。

偏見なる唯物主義者は物質生活現象計りでなく精神生命迄も純物質的に見ておる。
エルンスト、ヘツケルの如き其代表者である。彼は唯物一元論にて、無機有機及び精
神生活すべてを通じて唯一根本は原子中に存在する中心力である。之が万物の本源永
恒不變の性にて之が離合聚散に依て太陽も地球も乃至一切の生命をも生ぜしむ。一度
出来た生命は一方には順応により、また遺伝によりて、自然に淘汰せられて生物が種
種に変化し次第に複雑の度を増して原子中に内在する意識の可能性が終には精神作用
をなすように成りしとし、彼は物質不滅勢力保存の則に依て一切の精神作用の根元ま

でも夫に帰するものと云ておる。

人生帰趣の標準

世眼の導師仏陀は自ら宣えり、三界は我有其中の衆生は悉皆吾子と。一切衆生の父たる仏陀は衆生に教うるに、其標準を明すに両面あり。一には宇宙の大法と大勢力とに随うべく、二には各自の個性の靈性開發すべく示し玉えり。一切の生存よりすべてが宇宙の大法則に則らなければならぬ。人は宇宙の法則を外にして唯人間の力を以て自然法を左右することはできぬ。すべて宇宙に存する理法を發見して人間が應用することはできる。また一面に各自の本能性の伏能を開けば実に驚くべき力を有することを得。然れどもいかに靈妙なる伏能を有するも之を開發して頭動するにあらざれば功力あることなし。仏陀は宇宙の大法を以て一切衆生を終局の涅槃常樂に歸すべき

大法を明し一面には衆生の心奥に伏せる靈性を開きて成仏すべき理を示し玉えり。

初に宇宙大法(仏法)

宇宙の大法に二面あり。天則を以て天地万物及び衆生を生成する方と、一面終局目的を以て衆生の心靈を永遠常住の方面に摂取する法となり。前者は自然界の方面に向つて衆生を發展し因果的に生理的生活せしむるの理法にて、後者は心靈界の方面に衆生の心靈を摂取する光、如来の目的の方に向て心靈的に生活せしむるの法なり。前者は衆生法と云い後を仏法と云う。前者は法身仏の範圍にて後者は報身の領分である。また前者を研究するは自然科学にて、後者を研究するは哲学にて、之に順応するは宗教である。科学は天文学より生理学人類学等の自然界の一切生物が生存する理法を云。此頃或学者が自然科学と哲学との領分を定めて、すべて感覺的に見聞し経験し得らる

ほう 方を科学の領分とし、直覺し思考し判断し推定し觀察して研究する方を哲学の区域とすとの分界を定めたる如く、今仏陀が世眼として衆生を引導し玉う方面は衆生の靈性を開きて正知見を与え如來無量光の真理を悟り永遠の生命常住の平和なる涅槃を得せしむるにあり。故に自然界の方面ではない。

宇宙大法に二面の中、一面からは、宇宙の万物は自然界に器械的に因果の法則に依て行われておる。自然界の生物が一として因果法によらずして生成するものはない。啻に因果のみにあらず、空間には因と縁との關係を以て、時間的には因果の連絡を以て行われておる。

宇宙には法身の自然の方面に於て見るも、実に絶大なる設備を以て宇宙を構造し有ゆる生物を生存せしむ。自然科学者は此生物に對して何も宇宙を目的ありて生じたものでない、合目的の理ある杯とはよい加減な人間から左様想うておるに過ぎぬと云えども、更に進んで精神の世界の方には宇宙の大法は衆生を至善至幸の神の國に攝取し

たま せいい そん
玉う聖意の存することを信じて、其道を真面目に求むるのが宗教である。

ぶつだ うちゆう たいほう もくてき あきら はつご
仏陀は宇宙の大法と目的とを諦かに発悟なされて、一切衆生に教うるに、此法に則
このもくてき ずいじゆん
り此目的に随順すべきように指導し玉えり。

哲学的に終局目的の法

ぶつだ だいてつじん
仏陀は大哲人たると共に大宗教育家である。大哲人としての仏陀は自覚覚他覚行究満
とて自から自家の本源自性天真を悟り、又、他をも教えて覺らしむ、畜に覺るのみに
とど ちくぎよう えんまん
止まらず、徳行も円満して智徳完備して欠くることなきに至るを期す。今哲人として
ぶつだ おしえ
の仏陀の教によれば、法華經に曰く仏と仏とのみ諸法の実相を知り玉う。諸法の実相
とは、如来は宇宙万有の実相を知り玉う。実相論者は是る法を仏法と云。実相を覺せ
ざるものは迷て六道生死の苦を受け実相を悟る時は、即ち本覺の光が顕われて成仏す
まよい ろくどうしやうじ

と。

若し暫らく説明せば是である。宇宙の本体が即ち真如として一切法の本性である。其真如が随縁して現われたのが世界万有である。また衆生である。衆生と云も因縁離れてはない。夫を実に我あり、人あり、寿命ありと、執着するは迷である。此迷からして種々の業を造り六道生死の身を受く。若し我は因縁から生じたので因縁の本性は平等真如なりと悟り其本性に還れば自性清淨の涅槃である。解深密經に仏曰く一切の法の自性は本来寂靜にして自性涅槃なり。涅槃の故に自性は認むべからず。故に自性なしと説ぬ。諸法は衆生が相ありと執着するが故に有り。然れども是れ仮の名にして実無きなりと。次に諸法は因縁に依て成たる仮の有にして実は無きなり。次に諸法の本性は見るべからず。聞くべからず。生もなく滅もなきなり。

斯等は悟るべき実相をのべなされた。

重ねて諸法の実相

法華經に仏の曰く諸仏の智慧は甚深無量なり。其智慧の門は解し難し、入り難し一切声聞縁覺の智の及ばざる処なり。我曾て百千万億無數の諸仏を供養し諸仏無量の道法を行じ尽くして乃至未だ曾てなき甚深の法を成就して宜しきに随つて法を説く。舍利弗よ吾成仏して以来種々の因縁と譬喩とを以て広く教を説て衆生を導きて、諸の執著を離れしむ。之れ如来は方便智見波羅蜜を具足し、廣大深遠無量無礙無所畏禪定解脱三昧を以て深く法の無際を觀じ、一切未曾有の法を成就し給えり。舍利弗よ、如来は能く種々に分別して法を説くに言辞柔軟にして衆生を悦こばしむ。舍利弗よ、仏は是の如く無量無辺未曾有の法を悉く成就したりき。然れども止なん。舍利弗よ、我復之を説くべからず。其故は仏の成就し給える法は第一希有難解にして、唯仏と仏と

のみ其実相を究め尽し給えばなり。所謂諸法の実相とは、如是想、如是性、如是体、如是力、如是想、如是作、如因、如是縁、如是果、如是報、如是本末究竟等なり。如是相等の十如の本性が即ち真如の自性である。此自性を体として因縁から十界の相を画き出し因縁から現じたる相に執著して種々の善惡の業を造りて六道生死の苦を受く。若し自性の光明が十界三千が悉く自己心中に現われる時は即ち仏陀である。

宇宙の大道

宇宙大法の体性は絶対大靈即ち真如であるとは、已に明しぬ。是よりは大道の勢力として一切衆生を終局目的なる至善至美の神の国、即ち無上菩提に到達するの道法が宇宙に存在す。此れ即ち宇宙の終局目的である。一切諸仏は此大道に乗じて最正覺を成じ給えり。之を阿耨多羅三藐三菩提と云。訳すれば、無上道と云。此大道の勢力が

万有に内存す。一切衆生此正覺の大道を識らず、唯自が惑業の道をたどりて六道に流転す。斯大道に随順して向上する者は即ち成仏す。例えば、天体の軌道在て有ゆる星宿が、其軌道を逸せずして幾万年に亘りて替らず運行する如く、一切衆生の心靈を乗ぜしめて至善の終局に運行せしむる大道が阿耨菩提である。若し之を卑近に云わば天の命之を性と云。性に率う、之を道と曰う。即ち天命の性が行うべき道は公平無私なる天の道である。基督が所謂る我は我道を行くにあらずして神の道を行くなり。我道は私にして闇より闇に即ち地獄に行く道である。

仏教にて有漏の迷の業道に六あり。善に三等、惡に三等、之を三惡道及び三善道と云。

三種の菩提

金光明經によれば菩提に三義あり。真性と実智と方便となり。

真性とは天真自性不改不為の真理である。実智は能く真性を照すの智が真理に契う

道とす。方便とは能く善巧の機に随て化用自在なるを云う。真性も真性を悟るも、

また巧に道を以て衆生を度するも皆道である。菩提とは即ち仏と為の道である。出生

菩提經には三種の菩提を明し給う。声聞と縁覚と諸仏菩提である。声聞の人は菩提心

を發して声聞の道を行じて衆生を教化せず独り解脱を得る故に声聞道と云う。二、縁

覺菩提、縁覺の人は縁覺の道を行じて衆生を勸化せず、独り解脱を得るを縁覺菩提と

す。三、諸仏菩提、菩提心を發して諸の衆生を勸めて自解脱し衆生をして解脱せ

しむるを諸仏菩提とす。

阿耨菩提は無上の大道である。一切諸仏悉く此大道を行じて無上道を得。諸仏は

既に菩薩の五十一地の煩惱を除き元品無明を破り妙覺の位に入る。永く無明の父母に

別れ究竟して涅槃頂上に登り、諸法不生なれば、般若も不生之を大涅槃と名づく。法

性の大虚を座と為し、清浄法身を成じて常寂光土に居ることは、暫く天台家に於て阿耨菩提を得たる相を明す。斯無上の覺位に到達すべき道諦を阿耨菩提と名づく。台家には実は法性真如の月は自然に本から清虚に輝ておる。煩惱も染ること能わず、苦も悩ますことはできぬ、道も通ずることできぬ、滅も淨むることできぬ、いかに雲は群がるも、月の体を寵むとも妨害すること能わざる如し。煩惱却くれば、即ち真如の月は現る。道とは本覺の月を顕わす為に雲を除く所にあり。

大宗教家としての仏陀

大宗教家としての仏陀は世眼を以て衆生に云何に指導の光を与え給える哉。宗教的方面より指導し給うことは、聖道的に汝等自性清淨を発見せよと教給わず、宇宙に大なる大光明者を信念せよ、衆生は悉く大なる如来の子たる仏性の卵を具えている、

報身如來の大光明に摂化せらるる時は必ず大なる親と親近し啻に親を知見するのみにあらず、親の全き如く保養せらるべしと。今斯經は仏陀が自から弥陀の智慧光の下に知見を開き給ひ、弥陀は無量光なれば、斯光明に依つて一切の眞理を照見して余すことなきに至り無量光に照さると云も、仏陀の一切種智と云も、一体の両面にて、嚮きにも述し如く弥陀は靈界の太陽にて仏陀は知眼の開きたる者、知眼開きたる時に無量光の日輪円かに十方一切の眞理顯現す。之を能見者より一切種智と名づく。

仏陀は智慧眼を開きて弥陀靈界即無量光にして無量壽なる如來の光明の下に靈的生活し、一切衆生を指導するに弥陀の光明を獲得し靈に活きて完全に歸すべき道を教え給えり。詳かに後章に委せん。之は宇宙の大法則ミオヤの聖意に順う義なり。

衆生伏能の開發

向きに宇宙の大法に則りて終局の成仏に至るの理を述たり。此よりは宗教的主体たる個々に成仏すべき性能具有する哉否を明さば、若し本来自己に伏在する性能には宗教的に理想する如き靈的に活くべき可能性を具有する哉否やにつきて、若し自己に本能に伏在せる性能を完全に發揮すべき以外に望を發す如きは勞して功なきに終らん。例えば植物の種子に生産起元の作用を具えておる。故に之を播布し培養成長する時は花開実結おべき如く衆生精神の本能の奥底に伏在せる性能を完全に發揮せば可ならんのみ。然るに人の本来の性は善という性善説あり。また性惡説あり。基督教の如きは人の本性は惡なれども、神に救わるる性は有との説あり。また仏教の中にも五性各別説など。いつさいしめじよう杯は一切衆生には法爾として性が五に分るる、無性有情性、声聞定性、縁覚定性、菩薩定性、不定性之を五性各別と云。無性有情の人は善を為して入天の果報をば受くるに至るとも、若くは声聞等の無漏の聖性は具しおらぬ。故に解脱の性はない。菩薩定性の人のみ六度万行の果として成仏ができる。不定性の人は或は成仏できるあり又

できぬありと。

また 一切衆生 悉有ニ仏性。何人も成仏せざる者なしと云立義あり。中に就て五性各別説は權大乘にて方便説一乘眞実教によれば、一切衆生 悉有ニ仏性一無三一不成仏一とす。同じ仏教にて何故に相反対なる二説ありとならば衆生の性を明すに遠性と近性との二因あり。遠因には一切衆生 悉有ニ仏性一悉く絶対なる同一の根底 悉有ニ仏性一と説べくも然れども近因には其性相同じからず、或は宿因と云い、また遺伝素質同じからず、宗教に適不あり。之を土地の硬地と沃地とに例すべき如く其近因の素質に就て五性各別説のある所以なきにあらず。

人の性元

人即ち衆生の本性の本原を能く研究したるは、唐の宗密禪師なり。著書甚だ多し、

最も簡にして精なるは原人論である。今大意を提て述ば禪師が深く人の源原を究むるに、儒道二教の如きは人の淵源を説明するに云く、抑も人の源本は近くは乃父の祖を本とし、遠くは陰陽二氣、其本は一大元氣で夫が自然の道法に依りて万物を造化す、これが根本であると云う。換言れば、我此身の本は近くは親祖先から受たので遠くは天地の一大元氣より稟たるもの、本が一大元氣より稟るも畢竟する処は本の一大元氣に還るにあり。此らは其研竅に精廉巧劣ありと雖も現今自然科学者の見解も帰する処之に過ぎず。

此らは何れも人の本源を説明するに只形氣の方面より見たるも、精神的に内觀的研究にあらず。

仏教は人間の本源を心靈の方面より觀察して其の秘奥を語っておる。併ながら同じ仏教と云も其説く処浅深あり。又了と不了あり。浅きは曰く人の本源は業(カルマ)が本である。業の善惡に依て苦樂の果を招く。現世の自己は過去の業が造つたので現在

はまた未來の報を造りつつある。先づ業を根本とす。次に進んで説く所に依れば業を
 根本と云うけれども業は力であり力には体なかるべからず。宇宙には自然法爾として
 阿頼耶識なるものあり。訳すれば藏識とて喻えば藏の中に種々の物を包藏する如く、
 根境識の心識に主觀（心）客觀（物）と現すべき性を藏せる識である。此識が元とし
 て自己の心も外の万物も現じたのである。此識に有漏の種子が薰ずれば六道の衆生と
 国土と成り、無漏の真如が薰ずれば羅漢や仏と成り得らる。依て人の根元は即識で
 ある。此説は權大乘なので尚進んで、人の本性は真如仏性即ち如来藏性なので、此
 性には本来諸仏と等しく成仏すべき性を具有しておる。個々本具の仏性開顯すれば
 即ち仏である。

大乘教の衆生の根底

斯く研究し来れば同じく仏教と云も其本源に於ても終局に於ても浅深あり。今大乘
教中の眞実一乗教の説によれば一切衆生悉有ニ仏性一無三一成仏一即ち十方仏
土中唯有ニ一乘法一無レ二亦無レ三但除ニ方便説一とて一切衆生には悉く成仏すべき性能
本来具有することを仏陀は知り給えり。

仏陀が菩提樹下に於て正覺を成じ一切衆生を觀見して喟然として嘆じて曰く、奇哉
一切衆生具以ニ仏性一開レ之一切智無師自然智本來具有無レ異レ仏。又經に、我一
切衆生を觀るに衆生皆貪瞋愚痴等の煩惱の中に仏の知見、仏の眼と、仏の身とを具え
て儼然として動かず。善男子よ、一切衆生は煩惱の中に在りて常に汚れざる如來藏あ
り。徳相具足して我と異なることなし。譬えば眞金の不淨の中に墮て隠没して現れず。
年を経ても、眞金の質は壞れず、而も知るものなし。唯天眼ある者は能く眞金あるこ
とを知るが如し。又首楞嚴經に衆生本より仏性あり他より得べきにあらず、譬えば
人ありて自らの衣の中に如意珠を持ち乍ら覺知せざるが如し。又倉に宝を藏しながら

之を知ることなく、馳走して食を求むるが如し。上來は仏陀が哲人として自ら覺し他を覺せしむるに衆生本来自己の伏能を開きて人格を完成し最善の努力を竭して終生遺憾なきに至らば是仏なりとの理を述畢ぬ。

大宗教家としての仏陀

大宗教家としての仏陀は世の導師となりて、無尽の大悲を以て世に出現し、即ち弥陀応現の仏陀、一切衆生の大慈父として弥陀本願光明の眞理を顯示し、一切衆生は本弥陀法身の子たる靈性具せるあり。報身の大光明に摂取せられて仏性の卵が孵化する時は我は弥陀の子にして弥陀は我父なり。弥陀に養われて靈の眼開くる時は現在を通じて永遠にまでの生命と光明中の人となり、現在には理想的に弥陀の智慧と慈悲の光明とを被むりて価値ある生活如理の行為をなし、命終らば現実に如來の光明

ど
土が顕われ、諸仏と等しき正覚を成じ無量光の中に無量寿の涅槃を得るに至らん。是れ世眼が世の導師として衆生を宗教的に誘導し給う趣旨爰にあり。

経に如来無尽の大悲を以て三界を矜哀し所以に世に出興し広く道教を闡き群萌を拯わんと欲して恵むに真実の利を以てす。乃至一切諸天人民を開化し給うと。

仏陀世眼が指導の目的

若し知力の信仰より仏陀出世の主眼と為る処を明せば、衆生の仏知見を開示して仏の正道に悟入せしむるにあり。仏陀が世の父と為りて一切の子らが為に秘奥の宝蔵を開きて全部を子等に譲与し給う。之を悉く受るは即ち知見を開く処に在り。之を一大事因縁と名づく。

一大事因縁とは謂く、一とは即ち実相、其性広博の故に大とす。如来出世の儀式を事

とす。衆生しゆじやうが此実相このじつそうを（一心三千を）具ぐして能よく仏ほとけを感かんずべき機きの成なりしを因いんと為なす。如によ来らいは自みづから此実相このじつそうを証しやうして能よく度生どしやうに起き応おうするを縁えんとす。如來にやらいが世よに出現しゆつげんする所以ゆえんは皆みな一切衆生いっさいしゆじやう本有ほんやうの実相じつそうを開示かいじし、其それをして咸ことごとく仏ほとけの知見ちけんに悟入ごにやうすることを得えせしめんが為ために世よに出給いでたまう。此これを外ほかにして如來出世にやらいしゆつせの本懷ほんかいあらざるなり。若もし天台てんだいに依よらば、衆生しゆじやうの実相じつそうなる心性しんしやうの仏知見ぶつちけんを開示悟入かいじごにやうの四位しいを住行向地じゆうぎやうこうちの四十位しじゆういに配はいし、華嚴けごんの「初發心時便成正覺しよほつしんじべんじやうしやうがく、所有しやうの慧身他えしんたに由よつて悟さとらず、清淨法身湛然しやうじやうほつしんたんねん一切いっさい」の文もんに依よりて円教えんきやうの四十二位しじゆうにを明あかす。初發心しよほつしんは、初住八相成仏しよじゆうはつそうじやうぶつして分ぶんに証果しやうかを得う。慧心えしんは般若はん若にやの徳とくにて了因りやういん仏性ぶつしやう開發かいはつす。妙法身みやうほつしんは法身ほつしんの徳とくにて正因しやういんの性しやうを開發かいはつす。応一切おういっさいは即すなわち解脫げだつの徳とくにて縁因えんいん仏性ぶつしやう開發かいはつす。此三身このさんしんは本有ほんぬを開發かいはつす。故ゆえに他たに依よつて悟さとらずと云いう。仏知見ぶつちけん開示悟入かいじごにやうは十住じゆうじゆうの分証ぶんしやう成仏じやうぶつより究竟くきやうじやう成仏じやうぶつに至いたる迄までの階位かいいなり。台家だいけは聖道哲學しやうどうてがく的に自己じこの本性ほんしやうを開示かいじして自己じこの伏能ふくのうを円満えんまんに顯示けんじするを以もつて成仏じやうぶつとす。

是哲人これてつじんとしての仏陀ぶつだが衆生しゆじやうの本性ほんしやう知見ちけんを開示かいじすることを明あかしぬ。

宗教的の開示悟入

仏陀は斯経及び觀經等で仏陀が大宗教育家として、譬えば基督が愛なる天の父に對する如く、仏陀は大慈父たる無量光の光明普ねく十方法界を照して念仏衆生を攝取し給ひ三昧融合する時は仏知見開示され父の大神秘密藏の中に悟入することを教え給へり。

斯経には仏陀が阿難に教えて、汝西に向て無量寿如来を礼し上れよ。如来を見上ることを得ん。阿難が教えに随て無量寿如来を礼し上るに如来光明普ねく十方世界を照し給うを見上り、また如来の大音声徧ねく十方世界に響くを聞上り、また彼淨土に胎生と化生との二類あり。胎生の者は五百歲中七宝宮殿の中に籠りて仏を觀上り法を聞ことを得ず。何故に衆生彼の淨土に於て胎生するやとなれば彼の淨土は

本阿弥陀仏智より顕現したる浄土にて現世界は衆生の阿頼耶識を以て人間式に経験し
 ておる。故に彼の浄土に生を欣うも、衆生の阿頼耶識と善悪因果の上に現われたる娑
 婆の如くに思成じて往生を欣う人は縦令浄土に生じても五百歳中七宝宮殿の中に胎生
 すと。若し浄土は仏智不思議智等の五智の顕現なれば、阿頼耶識の罪惡因果の考を捨
 てて、正しく仏智の中に随順し仏智の光に靈化せられて仏智に相應する心となれば便
 ち七宝華中に化生して忽ちに諸の菩薩等と同じく智慧功德等具備して異なることなしと。
 たとい仏智を悟ることはできぬとも仏智と相應じて仏智の中に化生することを得。
 化生即ち仏知見開示である。觀經等にも知見開示して仏境の聖相を広説し給う。今
 暫らく宗教的に開示悟入の順序を説明せん。

仏知見の靈相

仏知見開示とは即ち如来の實在を啓示さるる相にて、基督教に啓示、また黙示とも云い、また聖靈感応の如き、大にしては仏陀が無明を滅し、正覚の光明現じたる時に舍那円満の如来が法身の菩薩等の為に無比莊嚴の相を現じて無量の珍宝を以て莊嚴せる蓮華藏世界に在すを見給う如き、また天台大師が法華三昧の床に靈山の一会未散釈尊法華の説法を聴上りし如き。晉の慧遠法師が三たび弥陀の聖容を觀上り、唐の善導大師が常に弥陀の真金色円光徹照して端正無比なるを觀上る如き、或は、また弥陀、為に法要を示し給う等、斯るを總て啓示とす。今暫らく開示悟入の階位を明さん。

開 (感覺的啓示)

如来の實在を知見せらるる先驅として顯現するは感覺的啓示なりとす。感覺的啓示とは三昧定中若しくは夢定中に或は明相現するあり、大さ錢の如く透明極りなく、或

は微妙なる花を見るあり、または仏の光明相好瑠璃宝地、または宮殿樓觀等の莊嚴
 或は天樂の音を聴き、または妙香異馨を感じるあり、或は甘露の妙味を感じ、或は柔
 軟衣を以て身を覆わるる等の、すべて色声香味等の五妙感なるを悉く感覺的啓示とす。

二示 (写象的啓示)

妙色莊嚴等を感じて進んで如来の智慧慈悲等の内包の聖徳を示さる。觀經に、
 仏身を觀る者は仏心を見る、仏心とは大慈悲是なり、無縁の慈を以て諸の衆生を摂
 す等、また如来の大円鏡智等の四智等を示さるを仏智慧が衆生の心中に顯現すること
 を示とす。

又説話的に啓示せらるるあり、聖善導が三昧定中に弥陀如来百余尺なる示現して
 告て曰く、樹を伐らんには連りに斧を下せ、縁なきには共に語ること莫れ、家に還ら

んには苦を辞すること勿れ、又緯をして三罪を懺悔せしめよ。方に往生すべし等の如く。また善導が觀經の疏を作るに結願して靈驗を要求するに夢定中に種々の靈相を感じ毎夜夢定中に常に一の僧ありて、玄義科文を指授し給うと。斯等は悉く如来より聖意を示されることを示とす。

悟 (法身理想啓示)

若し如来の三身の実在と靈能とを知見せらるるものとすれば感覺的啓示は、即応身にして、写象的なるは報身の智慧と慈悲等を示され、次に悟に証入するは即ち法身に契合するにあり。群疑論に説が如きは問曰念仏三昧所見の仏は三身の中には何の身を見るとせん。釈曰通じて念仏三昧を論ずれば、三身俱に念ず、無相の念仏三昧を得んとならば報化身の仏を念ずべしと、又修觀の者廉より細に至て先づ身色の觀

を為し後に報身を觀ずべし、是れ修學の次第なりと。

禪家にては直に自性清淨法身を發見す。之を見性即ち成仏と為す。之に準ずるに法身を見ることを悟の位と為ることを得。

入

既に如來の法体に証入し如來藏を開く時は本覺の如來は我父にて我は始覺の子である。父の所有は悉く我所有なり。法華經に説が如し。十力四無畏十八不共法等乃至一切の仏法藏に入て自在を得。又無生法忍陀羅尼門等を得。天台智者大師、光州大蘇山に於て法華三昧を修して法華經を誦し藥王品中是真精進是名眞法供養如來の句に至つて身心豁然と寂に入り、靈山會上に大衆と俱に法華經を聞く、會座が儼然として散ぜざるを徹見し給えりと。其後旋陀羅尼を得て弁才無礙を得たりしと。

結 論

上來説明し来りし結帰は仏陀が世の眼として衆生無明迷妄の中より永遠の光明に導くに、一方には大哲人たる仏陀宇宙法界の実相が即ち衆生の自性に之を图示すれば十法界三千の妙理悉く自己より顯現す。淨法身と云い寂光土と曰い、他に求むるに及ばず自心の蓮華開く時は正覺の光明が照す處、即ち清法身にて寂光土である故に仏陀は諸法実相たる自心を開發して正覺を得、大涅槃に入るべきことを導き給えり。大宗教家としては法界宮の中心本尊たる無量光如來に歸命信賴せよ、如來の光明に摂化せらるる心靈は更生し、身は此土にあり乍ら神は光明中の人となり、理想の淨土に在りて愈々報命尽る時は眞実報土なる大涅槃常樂我淨の土に歸入す。聖道としては眞理に悟達することを期し宗教としては今現に活ける如來を信念して靈の復活を期す。同一の終局に歸す。

果実も未だ熟せざる途中に於て落ちしものは障害のために目的を失えり。然れ共既に熟せし上に於て枝より離るるのは土中に入りて種子より萌発して自分も第二の樹に成らんとする目的あり。我等も念仏三昧を以て慈悲の親の養分を受け、靈核の成熟するを業事成弁とも悉地を得たりとも名け、果実に喩うれば、実が熟して第二の親木と成る丈の性分を備えし処なり。即ち熟せし靈の肉体を離れ捨てて、法性常樂の身になる資格を成じたるなり。